

発行所

札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部同窓会  
TEL&FAX(011)706-5007  
E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp  
http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/

編集人 田中 伸哉  
発行人 浅香 正博

# 北大医学部同窓会新聞



## CONTENTS

- (1)・医学部戦没同窓生追悼式を挙行  
・式辞……………浅香 正博
- (2)・追悼の辞……………笠原 正典  
・追悼の辞……………今村 昌耕
- (3)・追悼の辞……………黒田 練介  
・追悼の辞……………谷口 直之
- (4)・名誉教授 高桑 榮松先生(17期)を偲んで  
……………浅香 正博  
・教授退任ご挨拶……………筒井 裕之  
・新世紀の医学に向けて(29)……………西原 広史
- (5)・同窓会と歩んだ45年  
副会長退任にあたり……………橋本 紘治  
・妊婦さん世界一周プロジェクト  
……………箱山 昂汰
- (6)・第55回北海道大学医学展について  
……………松井 優祐  
・フラテ祭2016開催報告  
・新年会のご案内  
・フラテ103号発行のお知らせ
- (7)・告知板  
・事務局からお知らせ  
・新刊書紹介
- (8)・新刊書紹介  
・北海道医学会からお知らせ  
・北大総合博物館リニューアルオープン  
・平成28年度 同窓会員名簿について  
・ご逝去者  
・投稿を募集  
・編集後記



「追悼式会場」

## 医学部戦没同窓生追悼式を 挙行しました

7月2日(土)午後1時より医学部学友会館フラテにおいて、先の大戦で亡くなられた医学部医学科及び医学専門部ご卒業の方々を追悼し、平和を祈念して「北海道大学医学部戦没同窓生追悼式」を挙行了いたしました。

式は、浅香正博同窓会長(48期)の式辞で始まり、124名の戦没同窓生名簿を奉呈した後、参列者全員で戦没者の御霊に黙とうを捧げました。

続いて、ご来賓の笠原正典医学部長(56期)から医学部教職員を代表して、今村昌耕先生(19期)からご学友を代表して、黒田練介先生(38期)及び谷口直之先生(43期)からご遺族を代表して追悼のお言葉が捧げられた後、参列者一人ずつによる献花を行いました。

最後に、佐久間一郎副会長(55期)から参列者にお礼が述べられた後、全員で「都ぞ弥生」を斉唱して終了しました。

当日は、あいにくの空模様でしたが、ご遺族、同窓生及び医学部教職員など約50名が参列し、厳粛な雰囲気の中滞りなく追悼式を執り行うことができました。

終戦から71年を迎えるこの夏に北海道大学医学部同窓会として、初めて戦没同窓生を追悼し御冥福をお祈りすることができましたことは、関係の皆様のご助力のお陰であり、ここに深く感謝申し上げます。

なお、同日夜にNHK札幌放送局から、6日朝には全国ニュースで追悼式の様子が報道されました。



## 式 辞



同窓会会長 <sup>あさ か</sup>浅香 <sup>まさ ひろ</sup>正博(48期)

本日ここにご遺族並びにご来賓の皆様のご参列をいただき、北海道大学医学部戦没同窓生の追悼式を執り行うにあたり、戦禍の犠牲になられました御霊に対し、北海道大学医学部同窓会を代表して謹んで式辞を申し述べます。

先の大戦が終わりを告げてから、71年もの長い年月が過ぎようとしています。この戦争で軍医として徴兵され、戦禍の犠牲となられました124名の北海道大学医学部同窓生の方々に思いをはせる時、尽きることのない悲しみが胸にこみ上げて参ります。

皆様方は青雲の志を持って北海道大学医学部に入学され、熱心に勉学に励み、医学に関する知識や技術を習得して卒業されました。晴れて医師となってそれぞれの目標に向かって歩み始められたころ、あるいは入学と同時に大きな戦争が始まり、軍医としての重要な任務を果たしながら、それぞれが戦火に散って行かれました。医師としての大きな夢を持たれながら、志半ばで倒れられた戦没同窓生の皆様方の無念さは計り知れないものであります。

戦後、わが国の医学の発展はめざましく、欧米と肩を並べる状況となり、多くの国から多数の留学生を受け入れることが可能となりました。わが国の平均寿命は、長期にわたって世界のトップになっています。このように戦没同窓生の皆様方が夢見ておられたことの多くが医学の世界では実現しつつあります。北海道大学病院は大きな発展を遂げ、名

実ともに北海道の医療の中心となり、北海道大学医学部の学生を初め多くの研修医、専門医たちが集っており、わが国において最も信頼できる医療機関に育ってきました。

昨年、19期の今村昌耕先生から戦後70年の節目に是非戦没同窓生の追悼式を北海道大学医学部と同窓会合同で行ってほしいとのご提案がありました。これまで、戦没同窓生の追悼式を行っていないことに、誰も気づかなかったことは同窓会として誠に申し訳ないことと思ひ、笠原正典医学部長と相談し、本日北海道大学医学部戦没同窓生の追悼式を執り行うことになりました。北海道大学医学部で学び、医療の道を志しながら、道半ばで戦場に倒れられた皆様がおられたことを多くの同窓生に知っていただき、これらの方々の礎の元に北海道大学医学部が発展してきたことを忘れないでいきたいと考えております。

北海道大学医学部は2019年に創立百周年を迎えます。長い歴史を刻んできた北海道大学医学部の大きな区切りになりますので、医学部並びに同窓会をあげてその準備をいたしております。戦没同窓生の皆様方に恥じないような百周年を迎えられるよう努力をいたしたいと考えております。

終わりに、戦没同窓生の御霊の安らかたなることを心からご祈念申し上げますとともに、ご遺族の皆様のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。式辞といたします。



# 追悼の辞

医学部長 <sup>かさ はら</sup> 笠原 <sup>まさ のり</sup> 正典(56期)

北海道大学医学部戦没同窓生追悼式の挙行にあたり、北海道大学大学院医学研究科ならびに医学部教職員を代表して、追悼の辞を申し述べます。

先の大戦においては、医学部ならびに医学専門部を卒業した多くの同窓生が軍医として出征いたしました。苛烈を極めた戦況の下、医学部卒業生104名、医学専門部卒業生20名が帰らぬ人となりました。皆、医師として医学者として将来を嘱望されていた少壮の医学徒でありました。国の前途と家族の安全を憂えて志半ばで世を去らざるをえなかったご本人の無念と、後に残されたご家族、ご親族のお悲しみはいかばかりであったか、察するに余りあるものがあります。ここに、国を守り家族を守るために尊い命を捧げられた同窓生の御霊に謹んで哀悼の意を表し、ご遺族の皆様へ改めて心からお悔やみを申し上げます。

今日、我が国は世界でも有数の豊かな国となり、国民は自由と平和と繁栄を享受しています。民主主義、法の支配、自由主義経済といった価値観を、西側先進諸国を始めとする多くの国々と共有し、世界の平和と繁栄のために貢献する国家として国際的に名誉ある地位を占めるに至っています。これはすべて、先の大戦において戦陣に散った方々の尊い犠牲の上に成り立っております。われわれはこのことを深く自覚し、困

難な戦争に斃れた方々に感謝しなければなりません。また、同時に、戦争の教訓を風化させることなく引き継ぎ、平和を守っていくことは、現代に生きるわれわれ一人ひとりに課せられた責務であることに絶えず思いを致さなければなりません。

今般、昭和18年に医学部を卒業された今村昌耕先生から、元医学部長であり医学部同窓会会長を務められた齋藤和雄先生に対し、戦後70周年を機に追悼式の開催についてご依頼がありました。これを受けまして、現同窓会会長の浅香正博先生と協議の上、同窓会主催の追悼式を北海道大学医学部において開催することになった次第です。戦後71年目の追悼式開催は遅きに失するとは思いますが、戦没同窓生の方々が学ばれたこのエルムのキャンパスにおいて、皆様ご列席の下、本日、追悼の会を催すことができましたことは、私共にとってせめてもの慰めであります。今は安らかに眠っておられる戦没同窓生の方々に、母校たる北海道大学医学部を代表して深甚なる哀悼の意と感謝の気持ちを捧げます。

結びに、戦没同窓生の方々のご冥福を心からお祈りし、追悼の言葉といたします。



## 北海道大学医学部同窓生の戦没者数(判明分)

	卒業期	卒業年月	戦没者数	
医学部医学科	第1期生	(大正15年3月卒業)	4名	
	第4期生	(昭和4年3月卒業)	4名	
	第5期生	(昭和5年3月卒業)	3名	
	第7期生	(昭和7年3月卒業)	2名	
	第8期生	(昭和8年3月卒業)	3名	
	第9期生	(昭和9年3月卒業)	2名	
	第10期生	(昭和10年3月卒業)	4名	
	第12期生	(昭和12年3月卒業)	9名	
	第13期生	(昭和13年3月卒業)	15名	
	第14期生	(昭和14年3月卒業)	3名	
	第15期生	(昭和15年3月卒業)	9名	
	第16期生	(昭和16年3月卒業)	7名	
	第17期生	(昭和16年12月卒業)	12名	
	第18期生	(昭和17年9月卒業)	12名	
	第19期生	(昭和18年9月卒業)	12名	
	第20期生	(昭和19年9月卒業)	3名	
	医学専門部	第1期生	(昭和17年9月卒業)	6名
		第2期生	(昭和18年9月卒業)	11名
		第3期生	(昭和19年9月卒業)	3名
	戦没者総数			124名

## 北海道大学医学部医学科と医学専門部の概要

### 【医学部医学科】

大正8年4月 北海道帝国大学に医学部設置(修業年限4年)  
 大正8年9月 予科生入学(修業年限3年)  
 大正11年4月 第1期生入学  
 大正15年3月 第1期生卒業  
 昭和2年3月 第2期生卒業  
 (略)  
 昭和16年3月 第16期生卒業  
 昭和16年12月 第17期生卒業(修業年限3ヶ月短縮)  
 昭和17年9月 第18期生卒業(修業年限6ヶ月短縮)  
 以降昭和23年(第24期生)まで9月卒業  
 昭和22年10月 北海道帝国大学を北海道大学に改称  
 (略)  
 平成28年3月 第92期生卒業

### 【医学専門部】

昭和14年5月 北海道帝国大学に臨時附属医学専門部設置(修業年限4年)  
 昭和14年6月 第1期生入学  
 昭和17年9月 第1期生卒業(修業年限6ヶ月短縮)  
 昭和18年9月 第2期生卒業(修業年限6ヶ月短縮)  
 昭和19年4月 臨時附属医学専門部を附属医学専門部に改称  
 昭和19年9月 第3期生卒業(修業年限6ヶ月短縮)  
 以降昭和20年(第4期生)まで9月卒業  
 昭和22年10月 北海道帝国大学を北海道大学に改称  
 昭和25年3月 附属医学専門部が廃止(新7期生、旧7期生卒業)



# 追悼の辞

学友代表 <sup>いまむら</sup> 今村 <sup>しょうこう</sup> 昌耕(19期)

北大医学部卒業生第1期生から20期生、同じく臨時医専1期生より3期生の該当者中の124名の英霊にご挨拶申し上げます。

本日北大医学部同窓会、及び母校の医学部が、国難に殉じた既往の満州事変、日中戦争、太平洋戦争で不運にも戦死された方々の、[国家に対してのご功績]に敬意と追悼の念より、この式典を催して下さいました。

私も太平洋戦争に参戦し、生き残り、今日生存している少数の一人として、皆様に心よりの敬意と追悼の意を表明いたします。そして僭越ながら皆様を代表し、この式典を計画して下さいました方々に厚く御礼申し上げます。

また英霊の皆様のご遺族に、ご連絡が出きないこの式典に大勢の方々がご参列くださり、誠に有難うございます。

社会では、先の大戦は元号大正生まれの者が対応したと言われており、具体的には大正生まれの男子1340万人中、戦死者200万人、軍人戦死者240万人の8割に相当します。これが我々北大医学部、臨時医専の卒業期に当てはまる現象です。

大正生まれは惨めな時代と思われ、確かにそうなのですが、国難に殉じたと誇りとも考えたいと思います。20年前の私のノートに記載していた、この事実を伝える『大正生れ』という歌詞をご紹介します。

港で大正生れのグループが、替え歌で気丈をあげていました。

### 大正生れ

- 大正生れの俺たちは  
明治の親父に育てられた  
忠君愛国そのままに  
お国のために働いて  
みんなの為に死んでゆきゃ  
日本男児の本懐と  
覚悟を決めていた なあお前
- 大正生れの青春は  
すべて戦争のただ中で  
戦い毎の尖兵は  
みな大正の俺達だ  
終戦迎えたその時は  
西に東に駆けまわり  
苦しかったぞ なあお前
- 大正生れの俺達にゃ  
再建日本の大仕事  
政治、経済、教育と  
ただがむしゃらに40年  
泣きも笑いもだつしくて  
やっと振り向きゃ乱れ足  
まだまだやらなきゃ なあお前

- 大正生れの俺達は  
60・70のよい男  
子供もいまではパパになり  
可愛い孫も育てる  
それでもまだまだ若造だ  
やらねばならぬことがある  
休んじやならぬぞ なあお前  
しっかりやろうぜ なあお前

私は瀬戸内海の島蔭に潜んで居た、駆逐艦の電信室の外で昭和天皇のお言葉を聴きました。雑音と聞き慣れないお言葉の中に「忍び難きを忍び」というお言葉で敗戦を知りました。茫然と立ち尽くすうち、生き残れたこと、今後は戦死者の犠牲に報いる為、祖国の再建復興が生き残れたものに課せられた任務だと思えました。

戦は敗戦に終わりましたが、その後、世界の秩序に変化が起こり、東南アジアの先進白人社会の国に富を加えてきた植民地が無くなり、願望しながら叶わなかった諸国が独立国となりました。これに対し我々が代理戦争をしたという言論人もいます。英霊の戦死は無駄ではありませんでした。終戦当時の植民地の復活を試みたオランダは3年間の後に、大統領になったスカルノの独立戦争に敗れました。日本が言う大東亜戦争の裏話とされるのは、こんな事実からです。

当時を生き抜いた人々は経験したことですが、終戦直後の国の復興再建は大変でした。敗戦国の我が国が、現在は勝者と肩を並べている現状を皆様にお認めいただき、英霊に御報告したいと思えます。具体的には、復興の

兆しは昭和39年(1964年)の東京オリンピックであったと思います。終戦から19年目、まだ復興の途上、その内の数年は終戦直後のひどい状態であった時期を考えると、私は良くやれたと思います。新幹線の話も思い出します。普通列車は勿論、高速の新幹線の列車が分刻みの時刻表通りに運行されるのは先進諸国もびっくりしていました。

現在まで日本人ノーベル賞受賞者は平和、文学、経済などの部門を除く、医学理化学部門で24人。アメリカに次ぐ2番目の人数と言われています。最近134番目の元素が証明され「ニホニウム」と命名されました。また、昨年トヨタの自動車は世界一の販売台数だったそうです。

先を展望すれば、飛行機分野でも将来世界をリード出来るだろうという夢があります。私の中学時代だったか、糸川博士のペンシルロケットの記憶があります。それが今や宇宙工学部門では引けを取らず、数年かかる惑星探査を試みています。スポーツのアスリートも素晴らしい人たちが居られます。

英霊にこのような事を報告しご冥福を祈り学友代表のご挨拶とさせていただきます。





## 追悼の辞

遺族代表 黒田 練介(38期)

本日、「北海道大学医学部戦没同窓生追悼式」が執り行われるにあたり、遺族代表として、謹んで哀悼の誠を捧げます。式典開催にご尽力された同窓会会長浅香正博先生はじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

私は、戦死した8期生黒田二郎の長男で、38期生です。私の父は、第24師団野砲兵第42連隊第4大隊付軍医として、昭和20年5月16日、沖縄弁ヶ岳で戦死しました。36才でした。

私の母は、戦後ずっと、戦争にかかわりのあるものを避けて過ごしました。それは、子供三人を抱えて、教員の資格をとり、必死に生きてきたなかで、父が生きていたらと思うと、生きる力が萎えるからなのです。

母は昭和52年の沖縄での33回忌慰霊祭に初めて参加し、心の整理がついたのでしょう。父が戦地から私たち家族に宛てた手紙をまとめて本にしたいと、母から聞かされ、驚いたのを覚えています。父が実に264通の手紙を書いていたことは、知りませんでした。「望郷の海—沖縄に果つ—」として出版された書簡集を読んでみて、あらためて、家族に囲まれた平凡な生活を夢見ながら、軍医として、沖縄に散った父の短い生涯を偲んだのです。

父は函館中学から北大に進み、柔道部の中堅をやり、恵迪寮の生活を楽しましました。医学部を卒業後、小児科に入局。永井教授の指導を受け、その後第一生理の藪島教授のもとで、研究を終えた後、昭和16年1月、釧路市立病院の小児科に赴任しました。結婚した母との間に二人の子供 一姉と私一が生まれ、9月、三人目の子供も生まれる予定で、父の最も幸せな時期でした。

しかしこの幸せも長くは続きませんでした。わずか半年後の7月、召集されたのです。出立の朝、軍隊手帳がないと探したら、私が持ち出して、船や飛行機の絵を書いていたのです。私は3歳10ヶ月でした。旭川を経て、満州西西安に移動、野砲隊付軍医となった父は、颯爽と馬に乗り、日曜日には、歩兵連隊の同期の安倍三史先生と飲んだり、映画を観たりと、元気で「奉公」している様子が綴られています。同窓会から満州に「フラテ」が送られてきて、「黒田君、学位授与せらる。目下東安省にて活躍中、力と熱の君、余り頑張り過ぎて体を害わぬよう祈る。」と書かれていたと、記されています。戦局は激変していきました。昭和19年7月、父はついに沖縄に転戦することになったのです。

沖縄からの手紙には、検閲が厳しく行われたのでしよう。「当方の日々の生活など防諜上書けないし、また書いてもちょっと想像できないだろう。」と、母宛に書かれています。子供宛には、「・・・お父さんの仕事は、兵隊さんの病気をなおすことです。それで、あちこち廻って歩いて治療したり、入院さしたりしています。・・・兵隊さんのこと余りくわしくかけません。・・・久美子ちゃんは4年、練介ちゃんも間もなく2年生ですね。お父さんの知らない間に、あまり大きくなり過ぎて、何だかガツカリです。お父さんは何時、何処にいても元気でんぎですから、そんなこと心配せず、ウント元気に遊びなさい。」とあります。抑え

た書き方の言外に溢れるものを感じます。

父のいた壕が直撃弾を受けて押し潰され、父は戦死しました。砲空爆が止む米軍の夕食時間を待って、戦友が、父の遺体を掘り出し、埋葬してくれたのです。即死であったのが慰めとは思いたくありません。しかし、父が生きて延びて、動けない重症兵を、薬も与えず、放置したまま、南へと撤退するような状況に置かれなかったのは、せめてもの救いでした。

医師であり、作家でもある帯木蓬生さんの「軍医たちの黙示録」二部作には、過酷な条件のもとで、任務を遂行する軍医たちが描かれています。陸海軍将兵のいる所、必ず軍医もいました。軍医たちは、医薬品も医療器具も、そして食べ物もない、そんななかで、臨床経験が浅くても、戦傷のみならず、マラリア、赤痢、コレラなどの病魔と、そうして飢餓による栄養失調と、死力を尽くして、戦わなければならなかったのです。逃げ続ける軍隊の中で、傷んだ靴を繕っている軍医に、力尽きた瀕死の兵士が、自分の靴を脱いで、「軍医殿。これを履いて早く行ってください。」という記述には、胸が痛みます。

私が、疎開先の小さな駅で、遺骨を持ち帰ってくる母を迎えたのは、小学校3年生のときでした。白い布に包まれた木の箱を手にしたときのことを、今も思い起こすことができます。母の詠んだ歌があります。「駅頭に子を抱き挙ぐるが夢と言いに あわれ駅頭に子に抱かれる」・・・しかし、木箱の中には、小石が入っているだけでした。

さて、父の遺体を埋葬してくれた戦友が、後に帰還して、北海道沖縄会を結成して、初代会長となり、沖縄戦戦没者の慰霊に心血を注いだのです。不思議な縁で、私はこの会を手伝うことになりましたが、全身に砲弾の破片を浴びていた会長は、平成15年に亡くなって、私が後を引き継ぐことになり、毎年慰霊祭を行っています。

話は横道にそれてしまいましたが、戦没者慰霊に関わっている私個人にとりましては、戦後生まれが8割を超え、戦争体験への追認が薄れてきている今日、北海道大学医学部戦没同窓生の皆様に、こうした追悼の機会が設けられましたことは、大変意義のあることと思います。

今日の私どもの平和で豊かな生活が、皆様の尊い犠牲の上に築かれたものであることを決して忘れることはありません。戦争という悲劇を二度と繰り返さないよう努力を重ねていくことを、皆様の前で誓うことこそ、真の意味での慰霊になると考えます。

どうぞ安らかに眠りください。本日まで参列の皆様のご健勝と世界の恒久平和をお祈り申し上げます。追悼の詞といたします。



## 追悼の辞

遺族代表 谷口 直之(43期)

本日ここに北海道大学医学部戦没同窓生追悼式が開催されるにあたり、戦渦に散った124名の同窓生の遺族の代表として謹んで哀悼の意を捧げます。

またこの追悼式の開催をご提案いただいた今村昌耕先生、元同窓会長齋藤和雄先生、同窓会長浅香正博先生、副会長佐久間一郎先生、医学部長笠原正典先生そして医学部同窓会関係者の方々、また本日まで参列いただいている皆様にお礼申し上げます。

さて、124名という戦没者数は、当時の医学部の卒業生の一学年半に相当するもので、貴重な人材が失われたことは、北大医学部はもとより、我が国の医療にとって大きな損失でありました。私は、最近の北大医学部の目覚ましい発展を見るにつけ、この間の損失を補うべく、人材育成に尽力された多くの諸先輩や関係者の方々に改めて敬意を表したいと存じます。また、今後の我が国の医療や医学研究を担う多くの若い後輩の方々が国内外で活躍をされていることは、124名の方々も安堵されていることと存じます。

亡くなられた同窓生の方々は、家族の安泰を願い、生まれ育った故郷を思いながら、戦火に散り、戦場に倒れ、あるいは戦後帰還することが叶わなかったわけで、その無念さは計り知れないものだったかと思えます。一方、遺族は最愛の肉親を失い、この71年間に多くの悲しみと苦難の道を歩み、またそれを乗り越えてまいりました。

しかしながら、我々遺族にとりましては、北大医学部の卒業生の遺族であったことは強い誇りであり、また大きな心の支えとなり、それ故、将来に希望を持ちながら生きて来ることが出来ました。例えば遺族が病気になる際などには、多くの同窓の皆様や医学部の教職員の方々に物心両面から支えていただき、励ましの言葉をいただきました。私自身も昭和42年に卒業後、基礎医学教室で、平井秀松先生、高桑栄松先生、齋藤和雄先生、牧田章先生のご指導を賜り、また多くの先輩、後輩の皆様に支えられ研究者の道を歩むことができたことをこの場をお借りして感謝申し上げます。

この度、僭越ではございますが、少しお時間をいただき、4期生だった父正弘のことを、同窓の先輩との戦地でのエピソードを交えて、お話させていただきます。

父は、北大医学部を卒業後東京帝国大学衛生学教室に入局、その後北大で助手、助手として小児科永井一夫先生の教室に入り、学位は衛生学教室の井上善十郎先生からいただき、その後昭和12年に召集され満州に軍医として出征、いったん帰国して東京で厚生省社会局児童課に勤務をしておりました。昭和16年に軍医として再度召集され、第63兵站病院医師として満州に再び出征、その後昭和18年に兵站病院がフィリピンのマニラのマッキンレーに移動したのに伴い、そこで勤務しておりました。兵站病院の一部は米軍の空襲を避け、南ルソン島のナガに移動、ここではやはり戦況が悪化する中、別の兵站病院を率いて移動してこられた14期の平野新治先生にお会いしました。また11期の山田淳一先生も、たまた

ま兵站病院に葉を取りに来られ、父とそこで初めて会ったことを先生のご高著「比島派遣一軍医の奮戦記」に書いておられます。両先生は、戦後マニラの捕虜収容所で大変なご苦労をされた後に、無事ご帰還され平野先生は北大医学部耳鼻科の教授として活躍され、山田先生は淳ちゃんの愛称で、当時第一外科助教授として私どもにユーマアに富んだ講義をしてくださいました。父にとっては同窓のお二人に戦地でお会い出来たことは大きな心の支えとなったことと思います。私ども一家は、母と子供四人で、東京から空襲を避けて昭和20年1月に疎開し、種苗会社を経営していた正弘の兄が持っていた札幌郊外の藤野の果樹園に住むことになりました。平野先生はご帰国後私達一家を当時の耳鼻科の婦長鈴木木豊(とよ)様や父が小児科時代にお世話になり、戦後、北大看護学校教務主任として北大看護学校を牽引された葛西キヨシ様と度々訪ねて下さり、戦地での父のことを細かく報告して下さいました。私は当時幼少で内容は聞かされませんが、お土産に頂いた初めて見たクリスマスケーキに小躍りして喜んだ記憶がございます。平野先生が御退官される前の最終講義の中で、父正弘は東へ、平野先生は西へと進路を取られ、運命の別れだったことをお話しになり、その時になって初めてその事実を知りました。

さて、我が国は最近未曾有の自然災害で多くの貴重な人命を失いました。自然災害は、中々防ぎようはありません。しかし戦争は防ぐことができる訳で、過去の教訓をいかし、今後の我が国の歩む道が、間違った「この道はいつか来た道」ではなく、平和への道を歩むことを心から祈っております。

最後に、昭和43年に「白の十字架」という第63兵站病院追想集が刊行されました。その中で、普段はほとんど戦争のことを語らなかつた私の母が綴った一節をご紹介させていただきます。「荒れ狂う世界の情勢はどうしたことでしょう、誰しもが、それを望まないはずなのに、どこぞの人形使いが、いまにも、粉々に崩れそうな四肢のかわいい人形を操って踊らせているのでしょうか。悲しみ、みじめさを、歴史は物語っているのに。戦わなければ歴史の頁は重ならないかのように。そして必ず、つまらなかつたと後悔があるのに・・・。永遠の平和が、どうして築かれないものなのでしょうかー。」この言葉は50年たった今でも当てはまる言葉かと思ひ、紹介させていただきます。

改めて124名の同窓生の方々の心からのご冥福をお祈り致しますとともに、創立百周年を迎える北海道大学医学部の今後の益々のご発展と本日まで参列の皆様のご多幸を祈念致し、追悼の辞と、お礼の言葉とさせていただきます。





### 名誉教授 高桑 榮松先生(17期)を偲んで

北海道大学名誉教授 高桑榮松先生は平成28年5月4日安らかに97歳の生涯を閉じられました。

高桑先生は、昭和16年12月北海道帝国大学医学部を卒業され、井上善十郎教授が主催しておられた衛生学講座に入られました。昭和23年に医学博士の学位を取得すると共に講師に就任され、昭和26年には助教授になられました。

### 同窓会会長 浅香 正博(48期)

昭和29年9月から米国ピッツバーグ大学公衆衛生大学院修士課程に入学され、30年6月に修了、MPHの称号をいただき帰国しました。昭和32年8月に北海道大学医学部衛生学教室の教授に就任され、以後昭和55年3月まで21年半という長期にわたって教授職を務められました。この間、昭和45年から医学部長事務取扱、47年からは医学部長に就任され、昭和51年まで6年の長期にわたってこの

重職を勤めあげられました。当時は北大紛争の最も激しい時期で学生と教授との大衆団交が行われ、要求が通らないときには学生によるバリケードストライキがしばしば行われておりました。高桑先生は学生との論争に逃げることなく真っ向から挑まれ、徹夜の団交にもご自身の意見を堂々と主張し、長時間にわたって議論が続けられました。高桑先生が医学部長になってからさしもの学園紛争も潮が引くように下火になっていったのを記憶しております。もし高桑先生がこの時期学部長でなかったなら、北海道大学医学部は崩壊に近づいていた可能性が高かったと私は思っております。

高桑先生は昭和55年より3年間、環境庁の国立環境科学研究所副所長を務められた後、昭和58年からは参議院議員として二期12年にわたって国政に参加され、エイズ問題などで大きな業績をあげられました。高桑先生は私財を寄付され、昭和56年に高桑榮松奨学基金、昭和59年に高桑榮松学術交流奨学金を医学部に創設されました。これら多くの業績に対し、昭和44年に北海道医師会賞、昭和51年に労働大臣功績賞、昭和52年に北海道科学技術賞を受賞され、平成7年11月には勲一等瑞宝章を受章されております。

ここに謹んで高桑先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

## 教授退任ご挨拶



### 「北海道大学の 退職にあたって」

### 筒井 裕之

平成16年9月より北海道大学大学院医学研究科循環病態内科学を担当させていただいておりましたが、平成28年6月をもって退職いたしました。北海道大学医学部同窓会をはじめ医学研究科・病院の多くの先生方には長きにわたりご指導・ご支援いただいたにもかかわらず、そのご期待に十分にお応えすることもできないままに、任期を残し

て退職いたしますことを、こころより深くお詫び申し上げます。

11年あまり北海道大学の一員として研究・教育・診療に従事させていただくなかで、数多くの方々大変お世話になるとともに、実に多くのことを学ばせていただきました。心より感謝申し上げます。数多くの分野の先生方と共同で仕事をさせていただき、基礎・臨床の両面から心血管病に共通した基盤病態の解明を進めるとともに新たな治療の開発を目指した開発研究まで幅広く取り組むことができました。診療におきましても、念願でありました心臓移植実施施設の認定を受け、北海道

における唯一の施設として全道から重症患者さんを受け入れるなど体制整備が進み、診療内容も高度かつ充実したものになりました。さらに北海道大学センターオブイノベーション(COI)「食と健康の達人」拠点として、次世代を見すえたイノベーションにも関わることができました。私自身は、このような取り組みの中で次世代を担う医師・研究者が育ってきたことを、何よりも誇らしく思っております。ご指導・ご支援いただいた先生方に改めて厚く御礼申し上げます。

今後は、今までの北海道大学での貴重な経験を活かし、九州大学におきま

しても診療・研究・教育の充実に向け、力を尽くして参る所存でございます。いくつかのプロジェクトは、そのまま北海道大学を主体として継続し、私も参画いたしますので引き続きどうぞよろしく願いいたします。また、今まで以上に北海道大学と九州大学の関係を強固なものとし、共同でのプロジェクトを創出・発展させることができばと願っております。

北海道大学医学部同窓会さらに大学院医学研究科・医学部および北海道大学病院のさらなるご発展と皆様のご活躍を祈念しております。

ありがとうございました。

## 新世紀の医学に向けて (29)

### 北海道大学病院・がん遺伝子診断部

ゲノム医学の進歩により、悪性腫瘍(がん)は種々の遺伝子異常の蓄積によって発症する、いわゆる「遺伝子病」であることが明らかとなってきた。さらに次世代シーケンサー(NGS)の開発・導入により、診断・治療のパラダイムシフトが起こり、特に癌の分子標的治療薬の開発・適応には個々の症例における遺伝子プロファイリングが必須となっている。しかし、研究ではなく医療としてこうした網羅的ながん遺伝子検査を実施するためには、「臨床検査としての検体品質の確保」「検査システムの精度管理」「解析報告書の解釈と対応」、さらには「遺伝子診断の技術者・医師の育成」「遺伝子診断に基づく個別化治療体制の整備」など、臨床現場でクリアしなければならない課題が山積しており、網羅的ながん遺伝子検査を日常検査として実施する臨床現場は進んでいないのが現状である。

北海道大学病院では、平成26年8月に臨床研究開発センターに生体試料管理室(バイオバンク)を整備し、患者さんから採取された種々の生体試料(組織、血液等)を合目的に処理・保管し、臨床研究として次世代シーケンサーを用いた先

行的な遺伝子変異・発現解析を実施し、診療に必要な解析結果を速やかに臨床医にフィードバックする体制を構築した。こうした技術的背景を元に、平成28年4月に「がん遺伝子診断部」を設置し、「がん遺伝子診断外来」を開始した。院内クリニカルシーケンスを実施する専門部署としては、国内初の取り組みであり、さらに網羅的ながん遺伝子解析システム「クラーク検査」を開発して臨床実装した。「がん遺伝子診断部」は、検体処理とNGSによるシーケンスを担当する生体試料管理室を中心として、がん薬物療法を担当する腫瘍内科および腫瘍センター、胚細胞変異の判定と患者対応を担当する臨床遺伝子診療部に加えて、シーケンス結果の解析を担当する(株)三菱スペースソフトウェア(MSS社)のバイオメディカルインフォマティクス部門の連携によって構成され、チーム医療体制を敷いている。

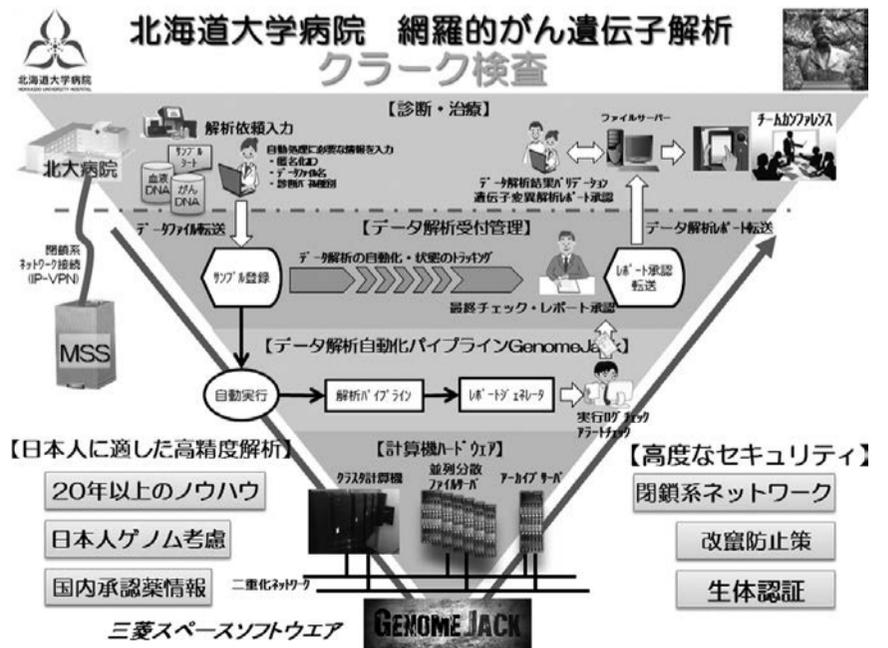
「クラーク検査」は、最大160遺伝子を標的としたアンプリコンシーケンスによるターゲットエクソームシーケンスであり、腫瘍組織から採取したがん細胞由来の遺伝子と、血液から採取した正常遺伝子を比較することで、腫瘍細胞特異的ながん遺伝子の異常(変異、増幅、欠失など)

北海道大学病院がん遺伝子診断部統括マネージャー  
北海道大学大学院医学研究科探索病理学講座特任教授  
西原 広史 (71期)



を検出する。本検査は腫瘍細胞の含有率が5%程度でも実施可能であり、従来のサンガーシーケンスに比して4倍以上の検出感度を持ち、得られた遺伝子解析データは閉鎖系VPN網による高度セキュリティネットワークを介してMSS社の自動解析システムへと転送される。MSS社のバイオインフォマティクス解析系に

おいて、COSMIC、ClinVarおよびCIVIC等、最新のゲノムデータベースから治療に有用な情報を付与し、作成された遺伝子解析報告書が約3日後に届く。平成28年4-7月の4か月間に43名の検査を実施し、腫瘍化の原因となるActionable遺伝子異常の検出率は86%、治療薬の選択に直結するDruggable遺伝子異常の検出率は44%で



あった。実際、本検査の結果に基づいて6名の患者が特定の薬剤による治療(治験を含む)を実施している。本検査は自費診療にて実施しており、患者の負担は約73万円(160遺伝子のパネル；平成28年8月20日現在)と高額であるが、

現在、院内検査にて実施しているがんクリニカルシーケンスとしては日本国内唯一のシステムであることから、関西～九州地方を含む日本全国から患者が来院している。

現在、より実効性のある遺伝子パネ

ルへの更新作業を行っており、また融合遺伝子検出システムの強化を予定している。さらに北海道がんセンター、北斗病院、および国立函館病院など、複数の基幹施設においても「がん遺伝子診断外来」を受診できるよう連携体

制を構築し、また治験情報ネットワークや個別化治療体制の整備を進め、北海道が「がんゲノム医療」の先進地となることを目指している。

## 同窓会と歩んだ45年 副会長退任にあたり

はしもと こうじ  
橋本 紘治(47期)



本年3月をもちまして、同窓会副会長を退任致しました。副会長在任は2期4年間でしたが、私が医学部同窓会の会務に携わったのは昭和46年4月、卒業と同時に同窓会評議員に任ぜられたのが始まりで、以来45年の歳月が過ぎていきます。卒業前の医学部4年のとき、北大医学部が第13回東医体夏季大会を主管しました。私が運営委員長に任ぜられ、折しも学園紛争の真っただ中で、その運営に大変な苦勞を強いられました。学生と大学組織の間に大きな亀裂が出来ている中で、細菌学教授の山田守英先生(9期)に東医体連盟理事長を、医学部長の衛生学教授高桑榮松先生(17期)に大会長をお引受け頂き、同窓会からも大きな支援を受けて、盛会裏に大会を運営することができました。同時に同窓会の力やその恩恵の深さを実感し、それ以来同窓会に対する感謝あるいは畏敬の思いを抱いております。

当時から同窓会は理事会、評議員会を中心にしっかりとした組織で運営されていて、情報広報メディアとして編集委員会が発行する同窓会新聞が非常に大きな役割を果たしていました。

編集委員会は昭和36年に発足し、初代委員長だった都留美津雄先生(19期)が昭和51年から再度編集委員長に就任され、その年に私も編集委員に任命され

ました。

都留委員長が新たに取り組んだのは、同窓会刊行物の改革でした。同窓会新聞を年3回発行することや会員名簿と同窓会誌を隔年毎に発行する現在の形を作られました。編集委員の任務も大変多く、委員会は年7.8回開催され、新聞、会誌、会員名簿の校正作業など手分けして夜遅くまで行ったことを覚えています。

都留先生は昭和52年1月発行の第36号から新聞の改革を実行しました。それまでの新聞とは大きく異なり、題字は山崎武夫同窓会理事長(14期)直筆の文字で横書きとなり、地模様は新たに刊行された同窓会名簿の表紙に用いた楡の樹皮の拓本で、これが現在も続いています。体裁だけではなく、それまでは医学部の広報紙のようだった内容を改め、内外の交流の場として、広く文芸や写真、絵画などを会員から募集する方針を実行しました。そして最初の号から1面の大きな写真や俳句や短歌、版画、同窓生の寄稿文などを掲載し、見て読んで楽しい新聞になりました。

1面の写真は、投稿がない場合は編集委員が撮影することになります。写真好きの私も数回採用されていますが、指名で撮影を依頼された平成2年1月第75号の写真には、一きわ苦勞しました。新年に相応しい札幌の日の出を撮って

みたいと考え、12月の晴れた早朝6時半頃から手稲宮丘公園に登り、寒さに凍えながら日の出を待ちました。当時はまだフィルム写真で、朝日が昇る瞬間に撮影条件を変えて数回シャッターを切らなければなりません。5回登って十数枚撮った中の一枚の写真が掲載されました。

編集委員会の大きな功績として、「写真集・医学部60年の歩み」の刊行がありました。医学部創立60周年記念で開催された写真展の写真をもとめて刊行するという作業から出発したのですが、当時の編集委員が中心となり、記念写真集出版委員会が組織され、昭和54年2月から作業が開始されました。2年間に及ぶ編集作業により1300枚近い写真を掲載した480頁の立派な写真集が完成しました。

都留先生が委員長を退任された後も、歴代の編集委員長松宮英視先生(24期)、橋本秀夫先生(専3)、井上和秋先生(35期)寺沢浩一先生(54期)の下で編集委員として、更には平成14年4月から8年間委員長を務めさせて頂きました。最初にチャレンジしたのは、新聞を横書きにすることでした。新聞には英字や数字が入った原稿も多く、縦書きの編集には、苦心をしていました。他の横書き新聞などを参考にして、横書きは平成17年1月

の第120号から思った以上にスムーズに実現しました。

委員長在任期間中の大きな出来事は医学部創立90周年記念事業でした。同窓生から寄付を募る広報や事業の経過報告など同窓会新聞が大きな役割を果たしました。また前委員長の寺沢先生が記念事業最大の柱であるフラテ会館建設に関して、外壁のレリーフの調査をされていました。元の医学部本館破風の下のレリーフを再現するというもので、私の期の卒業アルバムにかなりはっきり映っている写真があったので寺沢先生に知らせました。私も記念事業実行委員会に出席していましたので、両脇の花は延齡草にするなどを提案し、寺沢先生に図案を描いて送りました。出来上がったレリーフがなんと、ほぼ私の図案どおりで驚き、少しばかり貢献できたことを嬉しく思いました。そのレリーフのあるフラテ会館2階ギャラリーに、落成を祝って寄贈した旧北大病院内部の絵画が今も飾られています。

45年間に亘り、微力ながらお役に立てたことを喜び、様々な経験や楽しさを頂いた同窓会に心から感謝をするとともに、医学部創立100周年を控えて、その記念事業が成功裏に行われることを心から祈念しています。



レリーフ図案



フラテ会館レリーフ

## 妊夫さん世界一周プロジェクト



はこやま こうた  
箱山 昂汰  
(医学科4年)

休学をして468日間で43か国を巡る世界一周の旅に出た。しかも、現地の男性に妊婦体験ジャケットを着けてもらいながら、だ。

将来は国際医療に従事したいという夢があり、とりわけ母子保健分野に興味がある。妊婦体験ジャケットとは腹部に装着することのできる10kgの水の重りで、臨月の妊婦さんのお腹の重さを体験できる。世界一周の旅をする中で3日に1日はそれを装着して街を練り歩き、現地に出会う男性に声をかけて妊婦体験してもらった。今回の活動を通して世界の男性たちに妊娠時の大変さの一部を理解してもらい、お母さんという生き物を大切に想ってもらうことを目指した。

妊婦体験中の男性には、床にある物を

拾う、横になるといった日常の動作してもらい、お腹に重りがあることでどういった違いがあるかを感じてもらった。最後に「良いパパになってね!」と伝えて体験の締めくくりとした。

世界各国で合計1070人の方に妊婦体験してもらったが、声をかけて実際にやってくれる男性はおおよそ3人に1人の割合で、断られることの方が多く挫けてばかりであった。そんな中、これまで活動を続けてきて強く思うことがある。まず一つは、妊娠や出産について考えることは男女問わず「命」と向き合うことだということ。赤ちゃんを産むこと自体は男性には出来ないが、妊婦体験を通して少しでも「命」について考えて欲しい。二つ目は、以上のような熱い気持ちを伝えたいと願ってきたものの、妊婦体験ジャケットは結局ただの水の重りでしかないということ。例えばメキシコでは「こんなただの筋トレにしかないね」と自慢げに語るお兄さんもいた。妊婦体験の限界を噛みしめ、無力さばかり感じる

日々であった。

今回の活動を終えて一番に思うのは、世界はあまりにも大きく、自分は小さくて悔しいということだ。お母さんに優しい世界を創ることは、今の自分には出来なかった。しかし、ここからが本当の勝負だ。今

回の旅は、私自身にとってかけがえのない冒険の日々であった。この経験を活かし、更に更に勉強を重ねていつかは医師になり、もっともっと大きいスケールで世界に働きかけられる人になる!



# 第55回北海道大学医学展について



第55回医学展  
実行委員長

まつい ゆうすけ  
**松井 優祐**  
(医学科4年)

今年度の第55回北海道大学医学展は6月4日、5日に開催しました。5日には天候にも恵まれ、2日間合わせて約4000人の市民の皆様にご来場いただき、今年度も大盛況の内の開催となりました。開催回数も今年で節目となる55回を迎え、過去54回分の意志と歴史を受け継ぎ、その企画を時代に合わせて変えつつも、市民と医学・医学生との交流、ま

た医学展をきっかけとした市民の皆様の健康に対する意識の変化をその開催意義と考え、医学部学友会のご支援のもと北大祭期間中に開催されております。

第55回医学展は、医学展主導の企画5つ、外部団体企画2つ、医学部部活動による模擬店7つで構成されております。

医学展主導の企画としましては、エコー・心電図検査体験のできる心検査体験、肺活量測定体験、血管年齢・骨密度測定体験などができる「検査体験企画」、ドクターヘリ見学会、民間救急車見学会、献血、心肺蘇生講習会などができる「救急体験企画」、車いす体験、弱視・視覚障害体験、妊婦体験などが

できる「ハンディキャップ体験企画」、お子様も楽しむことのできる科学体験や病理学を織り交ぜた今年度からの新企画「病気をつきとめよう！」が体験できる「科学体験企画」、上級生による健康相談などのできる「いがくの窓口企画」の計5企画を実施しました。また、今年度は医学部公認サークルの国際医療協力勉強会なまらambitiousとの協力により、国際保健に関する講演会を開催しました。どの企画にも老若男女多くの方にお越しいただくことができ、学生スタッフにも積極的に質問をされるなど来場者の皆様の医学展への関心の高さがうかがうことができました。

当日においても多くの学生スタッフの協力の元、医学展を円滑に運営することができ、大きなトラブルはなく無事に終えることができました。また、学生と市民の皆様との交流も多くみられ、医学展としての開催意義は十分に達成されたものと感じております。

今年度の医学展開催に際しましてご支援・ご協力くださいました大学各局、企業、法人の皆様はこの場をお借りしまして、重ねて御礼申し上げます。

なお、医学展の企画詳細に関しましては第55回北海道大学医学展ホームページ(<http://hokudai-igakuten.org/>)をご覧ください。

## フラテ祭2016開催報告

フラテ祭実行委員会事務局

去る9月24日(土)、本年度で第10回目となる「フラテ祭2016」は北海道大学ホームカミングデーと同日に開催いたしました。同窓生、教員、学生親族、関連企業の方々など約130名が参加されました。

第1部の施設・キャンパスツアーでは、「医学部施設巡り」「キャンパス巡り」の2コースを設けました。最先端の医療施設や教室の見学・広大なキャンパスをバスでご案内し、どちらのコースも皆様楽しんでいただきました。

第2部の講演会では、笠原正典医学部長が「北海道大学医学部・大学院医学研究科の目指すものー現況と展望ー」、寶金清博北海道大学病院院長が「北海道大学病院2016」、廣重力北海道大学名誉教授(元北大総長)が「大学ガバナンスの20年を振り返って」と題してご講演いただきました。



第2部特別講演 廣重力名誉教授

その後、第12回音羽博次奨学基金授与式が行われ、11名の学生に奨学基金が授与されました。

第3部のフラテ交歓会では、始めに北大男声合唱団と医学部生によるピアノ伴奏にて「都ぞ弥生」・「学友会歌」が披露され、浅香正博同窓会会長の祝杯により開宴されました。北海道大学交響楽団の弦楽四重奏の演奏の中、和やかに歓談し、医学部生による公認団体の活動発表では、参加者の皆様興味深くご覧になっていました。最後に、参加者と北大男声合唱団が「都ぞ弥生」を合唱し、秋田弘俊北海道大学病院副院長のご挨拶にて閉会されました。

多くの方のご支援とご協力をいただき、無事にフラテ祭を終えることができましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。



第3部交歓会 歓談の様子

## 新年会のご案内

北大医学部・大学病院・同窓会合同新年会および  
医学部創立100周年記念事業後援会設立総会

日時：2017年1月12日木曜日 午後6時から

場所：札幌グランドホテル

会費：6-7000円(予定)

対象：北大医学部同窓会会員、医学部教員、病院教員など幅広い関係者

北大医学部では今年まで、木曜会・二水会合同の新年会が開催されていましたが、来年からはこれを改めて医学部・大学病院・同窓会の合同の新年会として開催することとなりました。また特に来年の会は医学部創立100周年記念事業後援会設立総会も兼ねます。同窓会会員の皆様の多数のご出席をお願いします。

【申し込み方法】：事前の申し込みをお願いします。希望する方は、住所、氏名、電話番号を記載し、出席する旨を明記して、電子メール、お葉書、ファックスにて申し込みください。

\*但し現在北大医学研究科・北大病院所属の方は別途紙媒体で出席をとりますので今回の申し込みは必要ありません。

【宛先】北大医学部同窓会事務局

e-mail: [furate@med.hokudai.ac.jp](mailto:furate@med.hokudai.ac.jp) TEL / FAX : 011-706-5007

住所：〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

【締め切り】 2016年11月15日

(発起人) 医学研究科長笠原正典、病院長寶金清博、同窓会長浅香正博  
(幹事長) 田中伸哉、(副幹事長) 平野聡、坂本直哉

## フラテ103号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、今春発行の102号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では今年度もフラテ発行に向けて準備を進めております。103号の発行は、来年3月上旬を予定しております。購読をご希望の方は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきますことにご理解をお願い致します。

また、当編集部には102号以前の残部もございます。ご希望の方は、103号をお申し込みの際に、振込用紙に

その旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。

なお、フラテの申し込みは同窓会新聞に同封の払込用紙(11月申し込み分と1月申し込み分の2回)のほか、102号巻末の払込用紙においても受け付けております。すでに102号巻末の払込用紙にて申し込まれた方は今回申し込む必要はございません。

また、102号を申し込まれた方で、まだお手元に届いていない方もどうぞフラテ編集部までご一報ください。

<103号の主な内容(予定)>

- ・特集記事 「新専門医制度について(仮)」 「消化器内視鏡医療の進む道(仮)」 「東京五輪

- に向けた禁煙の取り組みと課題(仮)
- ・フラテ各地に行く～兵庫(神戸)編～
- ・教室便り(医学部の各教室のご紹介)
- ・学年紹介(学生の他己紹介)
- ・新任教授 インタビュー
- ・みどりのベンチ 腫瘍病理学分野講師 谷野美智枝先生 インタビュー
- ・各講座新旧名称一覧
- ・フラテ茶苑(先生方の御寄稿文)
- ・学生の広場(学生の寄稿文) など

### 【フラテ茶苑 寄稿者募集】

フラテ茶苑では、ご卒業の先生方のご寄稿をお待ちしております。原稿執筆を希望される先生は、フラテ編集部まで原稿をお送りください。学生時代のお話、専門分野のお話、趣味のお話など、内容に指定はございません。また、字数に制限はございません。原稿につき

ましては、こちらで編集処理を行いますので、どのような形式でも結構です。掲載を希望される写真や図などございましたら、併せてお送りください。また編集作業の都合上、原稿は11月末を目途にお送りいただきますようお願い申し上げます。沢山のご寄稿をお待ちしております。

※フラテ茶苑へのご寄稿の他、フラテ編集部へのご連絡・ご照会下記宛にお寄せくださるよう、お願い申し上げます。

### <お問い合わせ先>

フラテ編集部  
TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)  
E-mail: [frate.med@gmail.com](mailto:frate.med@gmail.com)  
〒060-8638  
札幌市北区北15条西7丁目  
北海道大学医学部内 フラテ編集部

# 告知板

## <教授就任ご挨拶>

帝京大学医学部附属溝口病院  
外科・緩和ケアセンター教授



宮澤 光男 (61期)

2016年4月より帝京大学医学部附属溝口病院外科・緩和ケアセンター教授を拝命しております。私は、田邊達三名誉教授、井上芳郎名誉教授のご推薦により、1985年卒業後直ぐに慶應義塾大学医学部

外科学教室に入局いたしました。卒業後10年目からMIT, Cedars-Sinai Medical Center, UCLAに留学、その後14年間埼玉医科大学にて、臨床(肝胆膵外科)、研究(生体吸収性材料を用いた臓器再生)、若手医師の指導をしております。当院は、2017年5月より新病院となるため、緩和ケアチーム立ち上げの命を受け、現在、様々な準備を進めております。今後ともご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

東北医科薬科大学  
生理学教室教授



河合 佳子 (67期)

平成3年卒、67期の河合佳子と申します。この度、37年ぶりに新医学部が設立されました東北医科薬科大学の生理学教室教授を拝命し、本年4月1日に着任いたしました。

卒業後は北大形成外科に入局し道内の病院で形成外科医として勤務した後に、ご縁がありまして信州大学医学部生理学教室に異動し、リンパ循環を含む循環生理学の研究を進めてまいりました。

新しい医学部のためすべてがゼロからのスタートですが、臨床医としての経験を生かした生理学教育を進めていきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

## <学内・院内人事異動>

### <退職>

- 平成28年6月30日 堀田 哲也(70期) 内科Ⅱ 講師(JCHO北海道病院)
- 平成28年9月30日 土屋 邦彦(72期) 泌尿器科 病院長付助教 (KKR札幌医療センター 泌尿器科医長)
- 三輪 聡一(会員2) 細胞薬理学分野教授(公立豊岡病院 病院長代理)

### <採用>

- 平成28年7月1日 菊池 穂香(会員2) 死因究明教育研究センターオートプシーイメージング部門 特任助教
- 平成28年8月1日 中川 雅夫(74期) 血液内科学分野 助教
- 平成28年9月1日 七戸 秀夫(70期) 臨床研究開発センター 准教授
- 平成28年10月1日 田中 敏(71期) 死因究明教育研究センター病理学部門 特任准教授
- 堀田 記世彦(76期)血液浄化部 助教

### <昇任>

- 平成28年7月1日 保田 晋助(70期) 免疫・代謝内科学分野 准教授(同分野講師)
- 平成28年7月16日 西尾 妙織(会員2) 内科Ⅱ 講師(同科助教)
- 平成28年8月1日 夏賀 健(79期) 皮膚科 講師(同科助教)
- 平成28年9月1日 山田 崇弘(71期) 総合女性医療システム学講座 特任准教授(同講座特任講師)
- 氏家 英之(78期) 皮膚科 講師(同科助教)
- 乃村 俊史(78期) 皮膚科 講師(同科助教)
- 平成28年10月1日 敦賀 健吉(76期) 腫瘍センター 講師(同センター助教)

### <所属換>

- 平成28年10月1日 斉藤 仁志(80期) 麻酔科 助教(先進急性期医療センター助教)

# 事務局からお知らせ

## ご寄付のお願い

同窓会では、企業、団体、個人の皆様に、同窓会事業支援のためのご寄付をお願いしております。ご寄付をいただいた場合、ご了承を得て同窓会新聞にご紹介し、10万円以上のご寄付には、楯または額による感

謝状を贈呈させていただきます。ご寄付につきましては、同窓会事務局にご連絡ください。電話：011-706-5007 E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp

## 会員名簿の処分にお困りの方へ

会員名簿には個人情報に掲載されていますので、ご不用になった名簿は、例えばシュレッダー処分または焼却処分をお願いいたします。なお、ご自身で処分が困難な方は、郵便又は宅配便により同窓会事務局へ送ってください。

なお、恐縮ですが送料は各自でご負担願います。  
【送付先】〒060-8638  
札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部内  
北海道大学医学部同窓会事務局

## 同窓会費について

### ○会費納入のお願い

会員の皆様には、会費納入にご協力いただきありがとうございます。同窓会の事業は会員の皆様の会費によって運営されています。今後も意義ある同窓会活動を継続していくために、会費納入にご理解とご協力をお願い申し上げます。

### ○会費納入方法

①口座振替、②コンビニ納入、③銀行振込のいずれかによります。  
※詳しくは同窓会新聞に同封される払込票をご覧ください。

### ○会費未納者と刊行物の送付

・未納会費が2年を超える会員には、

会員名簿(同窓会誌)をお送りしません。  
・納入が9月30日を過ぎると、入金確認及び印刷部数確定の都合によりお送りすることができません。

### ○会費免除者と刊行物の送付

・会則により、卒業後55年を経過した

会員の会費は、翌年度から免除となります。  
・36期生は平成28年度から、37期生は平成29年度の会費から免除となりますが、免除前に2年を超える未納会費がある会員には、会員名簿(同窓会誌)をお送りしません。

## ドクター総合補償制度のご案内

同窓会では、会員のための「ドクター総合補償制度」を創設し、随時募集を行っています。現在、本制度には500名近い会員の皆

様が加入しており、大変ご好評をいただいております。ドクター総合補償制度には「医師賠償責任保険(勤務医向け)」、「医療・が

ん保険」、「所得補償保険」があり、団体割引が適用されるので個人での契約に比べて割安な保険料で加入することができます。

ドクター総合補償制度につきましては、同窓会事務局にお問い合わせください。電話：011-706-5007 E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp

## 新刊書紹介



### 「人間腫瘍学」

小林 博(28期)  
公益財団法人  
札幌がんセミナー  
¥500

本書は、北大医学部の教授時代に腫瘍学、病理学をご専門とされ現在札幌がんセミナーの理事長でいらっしゃる小林博名誉教授が、がんについて初学者や学生さん、さらには一般向けに解説されたものである。がんがなぜ発生するのか、現在の遺伝子変異解析の現状についてなど、最新の知見もデータとともに記載されており学問的な骨格は非常に太いものであるが、医学生やコメディカルの学生さんにも理解でき

るようにわかりやすく書かれている。特に少し前に「患者よ、がんと闘うな」という本も巷で売れたようであるが、その真偽に鋭く切り込む執筆形式は、敵を設定して一刀両断とまさに明快である。さらに本書はこのようながんの本質に切り込むばかりではなく、がん医療、予防などがんを取り巻く諸問題を、まさにがんを中心に360度取り囲む内容となっている。とりわけ筆者自身ががんをいかに克服したか、またがんになっ

た場合の哲学など、小林先生にしか書けない、人間が主人公のタイトルどおりの「人間腫瘍学」である。医学部3年生の時に小林教授の名著「腫瘍学」で勉強した身、今回あらためて通読させていただき、文章の端々に一人一人の患者さんに向けてのエールやメッセージを感じた。我が国では現在2人に1人はがんに罹患する時代、皆様にも是非ご一読をお薦めしたい。  
(66期 田中伸哉)



【わかりやすい核医学】

たまき ながら  
玉木 長良(会員2)、  
まなべ おさむ  
真鍋 治(80期)編集  
文光堂  
¥12,960

北海道大学医学部に核医学講座が開講され、30年を迎えました。国内で核医学診療科を単独で表す大学は数少

なく、より高い専門性を持って診療・教育に臨んでいます。この機会に、北海道から核医学のことを広めるべく、教室員が主体となり、放射線科専門医を目指す若手医師だけではなく、これから勉強される学生や核医学検査・内用療法が必要な診療領域で働くすべての人々を対象とした本を作成しました。難しくなりがちな核医学を、図表

や画像を多く配置することでより分かりやすく、基礎から最新の話まで包括させていただきました。放射能・放射線の基礎から一般核医学検査、PET検査、内用療法に至るまで網羅しておりますので、是非、手に取っていただき、わかりやすい核医学に触れていただければと思います。

核医学を用いた研究から臨床への橋

渡しは現在進行形で盛んに行われていますので、多くの知識のupdateが必要となってきます。この本の出版が最終地点というわけではなく、今後も医局員全員で研究成果はもちろんのこと、教育や知識の共有に役立つようなものを発信していきたいと思っていますので、辛口評価をいただければ幸いです。

(69期 志賀 哲)

# 北海道医学会からお知らせ

○北海道医学会ホームページURL  
北海道医学会のホームページを開設しました。下記URLよりご覧ください。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/hms/>

○北海道医学会について

北海道医学会は北海道における医学の進展を図るため、大正12年に発足した学術団体です。北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の医師、医学研究者及び本会の目的に賛同される方々には一般会員として、道内の主要医療機関には特別会員としてご参加いただいております。

○主な活動内容

- ・機関誌「北海道医学雑誌」の発行 (5月、11月：平成28年は第91巻)
- ・学術集会「市民公開シンポジウム」の開催 (10月下旬：昭和41年から実施)

・若手研究者への「研究奨励賞」の授与 (年3名以内に賞状及び副賞：昭和58年から実施)

○入会のご案内

本会に入会されていない同窓会員におかれましては、是非ご入会いただきますようご案内申し上げます。医療機関としてのご入会も歓迎します。

なお、会員には機関誌「北海道医学雑誌」を発行の都度お届けいたします。

入会方法、申込書は、本会ホームページ(コンテンツ：入会ご案内)より入手してください。

○お問い合わせ先

北海道医学会事務局  
電話 : 011-706-5007  
E-mail : digakkai@med.hokudai.ac.jp

## 平成28年度 同窓会員名簿について

本年度は、名簿発刊の年に当たっております。前回の同窓会新聞でお知らせいたしました通り、**「会員登録情報変更届」は、9月30日(金)をもって締め切らせていただきました。**住所変更等には可能な限り対応い

たしておりますが、**期日以降にご連絡いただきました場合、名簿の印刷には間に合わない可能性がございます。**申し訳ございませんが、その旨ご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

## ご逝去者

新聞154号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成27年			5月21日	竹内 友成	専新6
6月29日	中野 郁夫	48	5月24日	内井 亮吉	21
10月	紺野 誠一	専旧6	5月27日	沢口 亮三	37
10月4日	村田 欣造	31	6月2日	沢谷 順士	38
10月20日	末国 正美	48	6月12日	三好 宣明	43
11月6日	駒田 盈郎	21	6月14日	飯坂 英雄	42
11月9日	近藤 修寛	29	6月18日	遠藤 一寧	39
11月24日	深瀬 寛	専5	6月18日	高橋 昭重	46
平成28年			6月20日	高橋 昭三	31
1月17日	長野 一雄	33	6月25日	高藤 保信	45
1月23日	小野寺 忠純	25	6月28日	高野 淳直	15
1月31日	後藤 瞳	36	7月2日	高橋 正一	専3
2月23日	吉田 忠権	権太	7月6日	板倉 泰一郎	31
3月2日	中野 幸雄	38	7月6日	竹本 利賢	38
3月19日	松下 幸夫	37	7月8日	今井 明夫	39
4月6日	七戸 幸隆	26	7月9日	山川 純一	44
4月15日	酒井 良洋	権太	7月14日	川山 純一	40
4月22日	鈴木 重義	48	7月15日	上田 則行	41
4月25日	大久保 一了	47	7月16日	伊藤 崇志	36
4月30日	高山 憲一	専5	7月20日	堀本 吉志	49
5月1日	吉本 憲一	35	7月23日	石山 吉昌	45
5月5日	田村 憲行	31	7月30日	山崎 昌司	49
5月9日	土屋 文男	専4	8月15日	嶋崎 匡	35
5月11日	小山 達朗	専新7	8月30日	宮田 亮	24
5月13日	森本 欣吉	31	9月12日	佐藤 業	専7旧
5月16日	横田 一郎	33	9月28日	辻 功	31

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。  
<http://www.med.hokudai.ac.jp/alum-w/news/index.htm>

# 北大総合博物館リニューアルオープン

去る7月26日に北大総合博物館がリニューアルオープンしました。本博物館は理学部の旧館正面の建物を利用したもので、時計台や農学部本館とともに、北海道大学のシンボルとなっていた趣のある建物です。昭和4年創建当時の外観ですが、内部は博物館として立派に整備され、落ち着いた雰囲気のカフェも開店しています。博物館は、北海道大学の歴史をはじめ、北方文化・民族・考古学関係や、北海道の自然、化石や生物の標本など、北海道大学ならではの展示で充実しております。今回のリニューアルでは、各学部の教育・研究内容を市民の方に理解していただき、北大を志望する受験生の方にアピールしようと、各学部展示を全面的に更新いたしました。医学部の展示は、教育・研修内容の紹介に始まり、「陽子線治療」、「がんゲノム診断」、「遠隔病理ネットワーク」、「死因究明センター」、「内視鏡診断・治療」など、北大病院および関連病院が参画した最新の臨床活動が紹介されています。展示はスライド・動画を駆使してビジュアルに構成されており、これは腫瘍病理学分野の石田雄介先生のご尽力によるものです。なかでも来館者の方に人気なのは、消化器外科分野より出品されている腹腔鏡手術の練習セットです。これは同分野が開発し、実際に若い先生方が手術の練習に使用しているものですが、今回、装置を共同開発した中央ネームプレート製作所と、機器を提供して頂いたジョ

ンソン・エンド・ジョンソン株式会社のご厚意により、一般の人が操作できるように博物館仕様に改造した装置を展示しています。お子さん方が入れ替わり立ち替わりで、ビデオモニターの画面を見ながら、楽しそうに操作しています。展示にご協力いただいた同分野の七戸俊明先生は、「若い方に手術に興味を持っていただき、外科医を志望する方が増えることを希望しています。」と語っていました。

博物館は午前10時から午後5時まで開館しています。月曜が休館で、土日も営業しています。普段は臨床でご多忙な先生方も、ご家族と一緒に、植物園、総合博物館、モデルバーンと北大を南北に縦断する散策に週末の1日を当てられてはいかがでしょうか。

(66期 泉剛)



## 投稿を募集

医学部創立100周年に向け、シリーズ「思い出の写真」の投稿を、右記の要領で募集いたします。掲載号および掲載順につきましては、編集委員会にご一任くださいますよう、よろしく願いいたします。

- 1.写真1枚(タイトルをおつけください)をお貸しください。
- 2.本文300字以内でお願いいたします。
- 3.事務局宛にメールあるいは郵送でお送りください。

〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部同窓会事務局  
E-mail : furate@med.hokudai.ac.jp

## 編集後記

先日のリオ五輪の閉会式では、日本のコンテンツや表現力に全世界が息を飲みました。もちろん日本の医学をはじめ自然科学や産業も、7月の追悼式で今村先生が仰った通り、敗戦国ながら戦勝国と肩を並べるところまで至りました。

今日、我々が北大医学部や、最先端、最前線の現場で働けるのも、創立以来、戦中戦後を経て現在まで、診療や研究

に日夜励んだ先輩方、戦や災害、病など志半ばに倒れた先輩方のお蔭だと、この夏、感じました。

今後は、私の後輩達にも先輩方の歩みを引き継ぎ語り継ぐとともに、私自身が「ネット世代」や「スマホ世代」に検索されて恥じない生き様や歴史を残せるか、改めて身が引き締まる思いがします。

(75期 石田雄介)

印刷所 **大日本印刷(株)** 〒065-0007 札幌市東区北7条東11丁目1番1号  
代表 (011) 750-2205